部品工場の星

KOTONONE
Series of Stories
vol.11

シリーズ 障害者の就労事例 11

手話の「おはよう」で、元気な朝になる 田中靖子さん（株式会社レグルス）

編集部＝文
text by Kotonone
信澤邦彦＝写真
photograph by Kunihiko Nobusawa

ろう者の田中靖子さんが、株式会社レグルスで働くことができるのは、みんなが朝、手話で「おはよう」の挨拶をしてくれるから。元気と安心をつくってくれるから。車いすの重度障害者である、レグルスの伊藤良一社長は、自身が障害者となって、障害者雇用に目覚めた。レグルスを、誰もが安心して働くことのできる職場にした。

チューブを通す真剣な表情

三重県鈴鹿市。名古屋からは電車で三〇分ほど。中京圏のベッドタウン的な位置づけを持つ地域だ。京都も近く、冬は岐阜まで足を延ばせばスキーも楽しめる、地味ながら便利な街。年に一度、鈴鹿サーキットで行われるF1日本グランプリの時期だけは、全国から来るモータースポーツファンでにぎわうけれど、普段は静かだ。

鈴鹿市にはホンダの工場があり、周囲には自動車関連の部品製造業が集まっている。

左から伊藤良一さん、田中靖子さん、伊藤弘美さん

全ろうの田中靖子さんが働いているのは、そんな部品製造工場の一つ「株式会社レグルス」。主に自動車用のワイヤーハーネスを製造している。ワイヤーハーネスとは、自動車内で電力や電気信号を伝えるケーブルの束。いくつか種類があるケーブルを選び、結束する。

代表取締役社長の伊藤良一さんは、自身が車いすの重度障害者。一九九五年に事故にあい、脊髄を損傷した。それまでは障害者とはなんの縁もなかったが、リハビリして社長に復帰してからは、社会福祉法人朋友を立ち上げ、さらにレグルス本社でも障害者を雇用している。今では朋友で約五〇名、レグルスで九名の障害者が働く。

入社二年目の田中さん、「仕事が速くて正確」と、伊藤良一さんの実妹であり、工場長の伊藤弘美さんからの評価も高い。作業台に向かっている田中さん、集中した表情で黙々と作業を続けている。所定の本数を結束し終わって、伊藤弘美さんを呼ぶ。検品して、OKが出ると、ほっと一息。真剣な表情が、一瞬で笑顔に変わった。